

秋

『新壑』  
27-1号

吾が頬を打擲して吹く風あり秋には秋のきびしさもあらむ

少年のポケットにふくれしボール午后の秋空にやがては跳ばむか

餌ふれば忍ち寄りきて口あくる金魚は吾と同じ智慧持つ

凝視する吾にかゝはらず鉢に遊ぶ金魚は自在に恋も遂ぐるに

秋長きこのごろにして降りつく雨よ吸はれる如き淋しさにあつ

冬の沈黙

『新壑』3号

ポンプより溢れし水が床に凍りゆく憎しみ合ひるし日の真昼

憎みきれぬ心今よりは大切にせむオルゴールより鳴るはアンニロー  
リ

芋版を彫る少年のポーズよ憎みるし昨日は既に過去となる

吾が存在或は負担となりるしか夫のこのごろ黙す日の多く

面下げて何んに気鬱する夫か裸木が風に鳴る夜の沈黙

ポマードの匂ひつよき夫に添ひいゆく夜を明るく降る雪の中

吾が未来占はられしより持つ優越感鏡面をぼかすは白き蒸気

ステイム

冬の汚れ

『新壑』  
27-4号

過ぎゆきし時を取り戻さむ術もなし雪に埋もれたる赤土の庭

天井より鼠の糞のこぼれきて冬の畳は汚され易き

寒に干すシヤツ一枚硬ばりてやさしき午<sup>ひる</sup>後の陽に霏する

挿す花にも見飽きて冬は長かりし一人の言葉守らむために

不器用な手つきにて夫が剥くりんごの黄肌になじまぬ夜があり

春夜

『新壑』  
27-7号

春の夜の浅き眠りに聞く雨音のその单调さもいつか煩はし

支へ合ひるてくづれ易き愛と思ひぬ春風ぬるく吾をゆすぶる

冬の芥集めては焼くこの夕べこのくり返しに背信を知る

猫を愛せぬ貧しき二人春泥に夕べの歩みからませて行く

夜の靄につつまれて立つ鉄塔の堅き表情もぼやけたりしか